

未来へつなぐ まちづくりは人づくり
～甲斐の国からともに～

日本女性会議 2021 in 甲府

2021(令和3)年
10月22日(金)・23日(土)・24日(日)



日本女性会議
2021 in 甲府

開催場所

YCC 県民文化ホール・山梨学院大学

主催

日本女性会議 2021 In 甲府実行委員会・甲府市

特設サイト



未来へつなぐまちづくりは人づくり

～甲斐の国から ともに～

日本女性会議 2021 in 甲府

2021年(令和3年)10月22日(金)・23日(土)・アーカイブ配信 24～30日

開催場所：YCC 県民文化ホール・山梨学院大学

主催：日本女性会議 2021 in 甲府実行委員会・甲府市

日本女性会議は、今年38年目を迎えました。コロナ禍2年目で、昨年同様、オンライン開催でしたが、幸いなことに、目黒区の会議室や自宅で、目黒女性団体連絡会の希望者全員が、会議に参加でき、学びを深めることが出来ました。シニア世代が多い当団体ですが、急速な情報ツールの変化に、お陰様で私たちも何とか対応できるようになり、思わぬ福袋を頂いた気がします。因みに例年は2名現地参加でした。

ご担当の甲府実行委員会の皆さま、準備から当日の運営、ご苦労されたことと存じます。本当に有難うございました。

私たちが志を同じくする仲間として、一步一步ジェンダー平等への学びや活動を、継続していきます。そして、明日を託す若者たちが、希望や勇気にあふれた人生を力いっぱい生きることが出来ますよう、微力ながら応援して参りたいと思います。

目黒女性団体連絡会

代表 齊藤眞澄

シンポジウム 「日本女性会議 38 年目の総括と未来」

～日本女性会議 2021 in 甲府からの提案～

2021 年 10 月 22 日（金） 15:30－17:00

報告者：石塚英子・深山キクエ

講師：メインシンポジスト 上野 千鶴子（社会学者・東京大学名誉教授）

コーディネーター 風間 ふたば（山梨大学理事 副学長・地域人材養成センター長）

シンポジスト 4 名

このシンポジウムは、「日本女性会議 38 年目の総括と未来」をテーマに、日本女性会議の役割とあり方を議論することを目的とする。まず、大会開催に先立ち実施されたアンケート結果を、事務局が報告した。次いで、メインシンポジストである上野千鶴子さんがアンケートの分析結果と考察を講演した。その後、2017-2020 年度の歴代実行委員長 4 名がシンポジストとして意見を述べ、最後に上野さん、風間さんの総括で終了した。

1/ アンケート結果概要

- ・大会の誘致・開催形態は①行政主導、②市民協働、③市民主導の 3 分類
- ・大会の成果 ①「男女共同参画」の浸透、意識啓発、②団体間のネットワーク育成
- ・今後の課題 ①得られたネットワークの活用、②次世代の活動者・新規参加者を獲得するために、彼らが興味・関心を持つようなテーマの採用、SNS・オンラインの活用

2/ メインシンポジスト 上野 千鶴子さんの講演

- ・行政とフェミニズムの変遷を総括。2011-2021 年は第 4 期で、東日本大震災で被災し目覚めたジェンダー意識と「わきまえない女」の台頭。
- ・日本女性大会は行政にとっては経済効果が期待できるイベントという位置付け。
- ・自治体には変化を起こせていないが、市民・企業の意識と市民団体の活動を活性化
- ・参加者には、自分の自治体でもできる、やりたいというエンパワーメント効果大
- ・大会の課題は、①高齢化、②世代間の断絶、③情報ツールの変化（オンライン・ICT）
- ・日本女性会議に価値はあるが、全国組織がない中、熱意のある人たちが自治体を動かし、バトンを繋いで行かなくてはいけないという危うさを抱えている。

3/ シンポジストからの発言

3-1/ 高橋 雅子さん（平等社会を推進するネットワーク 苫小牧会長 2017 年 苫小牧）

- ・5 年間の準備期間で 2017 年に誘致
- ・市長が議長になり子育て世代を含む市会議を立ち上げるなど、市長との信頼関係構築
- ・女性センターを「男女共同参画センター」に改名することに成功
- ・企業は SDGs に取り組むようになり、行政も大きく成長し変化
- ・市民団体は学習会を通じて活性化、NVEC と連携し全国ネットワークを立ち上げ

3-2/ 八重澤 美知子さん（金沢大学名誉教授 2018 年 金沢）

- ・大会の成果 ①市議会の正・副議長が女性に、②パートナーシップ宣言施行、③家事シ

ェアプロジェクトを立ち上げ男性の家事参加を推進 ④「トモ活」＝男女が共に活躍する社会推進事業開始 ⑤公立学校の女性管理職比率全国1位＝37.8%、⑥金沢プライドパレード (LGBTQ) に300名参加

・劇的な成果 ①協賛125社、②ボランティア340名、③参加者増加(学生・留学生含)

3-3/ 藤井 佐知子さん(宇都宮大学理事・副学長 2019年 佐野)

・大会の課題 ①担い手が時間的・金銭的に余裕のある専業主婦とシニア層、②開催日程の制約で参加者の中心は60代、③年1回開催のため、持続的な成果に繋がらない

・今後すべきこと ①改革(若手と現役世代を対象とし、コンテンツとツールを見直す)、②リノベーション(女性問題に注力し、議論を積み上げる)

3-4/ 山根 真理さん(愛知教育大学教授 2020年 刈谷)

・日本女性会議初回の開催地名古屋では、「男女平等共同参画審議会」を立ち上げ

・刈谷大会の位置付け ①行政主導タイプで市政70周年事業とタイアップ、②オンライン実施となり、参加費を下げ(一般4000円→2000円・学生無料)、2301人が参加、③オンラインのおかげで参加者は県外が6割、30代以下が2割強と様変わり

・大会の効果 ①女性のエンパワーメント、②市内の小中学校で男女混合名簿を実現

・課題 ①次世代に繋げる言葉と仕掛け、②単発イベントを日常化、③リレー形式のため、前例主義に陥り、小さな自治体が手を挙げにくく、地域ごとの独自性が出しにくい

4/ 上野 千鶴子さんの総括

・シンポジスト全員が実行委員長だったので提言が具体的でとても良い。

・開催地から全国に発信する大会なのでオンライン開催が馴染む。

・世代間の断絶を解消するためには、各当事者が固有の問題を扱えるように、各当事者が発信できるチャンネルを作る。

5/ コーディネーター 風間さん(2021年 甲府)の総括

・男女平等問題は根が深いことから、大会を続け、議論し、繋がることに意義がある。

~~~~~

〈感想・意見〉

・上野さんが述べている内容に共感することが多かった。日本女性会議が38年間もリレー形式で続けられてきたことは、開催地の経済効果や意識啓発・市民活動の活性化等、プラス面が多々あって、すばらしいことだと思う。しかし、年一回のリレー式開催では持続的な成果につながらないという課題もある。いま世界的にもジェンダー平等が話題になる中、成果を積み重ねていけるような取り組みも必要と思った。

・2018年の国内研修でお世話になった倉吉市日本女性会議準備委員会関係者より、2023年の開催都市として目黒区に手を挙げるようお誘いを受けている中、このシンポジウムで日本女性会議の成果と課題が整理されたことは意義深い。「継続的な議論と繋がりがあってこそその活動の日常化」を目指すことの意義と難しさを改めて強く感じた。

## 分科会1 多様な性と家族、パートナーシップ

### ～コウノドリ作者と考える多様な生き方と制度～

2021年10月24日(日) 11:30～13:00 (男女平等共同参画センターで視聴)

報告者：郡玲子・米田貴子

講師：鈴ノ木 ユウ (漫画家)

コーディネーター 富永 貴公 (都留文科大学教養学部准教授)

司会：飛嶋 一步 (LGBTQ+に係る任意団体「CoPrism (コプリズム)」代表)

産婦人科医を舞台にした漫画「コウノドリ」の作者、鈴ノ木ユウさんをゲストに、参加者からの質問を交え、トーク形式で話が進みました。

#### 《第1部》 多様な性を生きる人々の現状について

— 一 家族との関係はどうか

○ミュージシャンの妻の音楽活動を優先するよう育児・家事をサポートしているが、漫画の連載中は睡眠時間が2～3時間という状況で夜に子どもと遊ぶだけになってしまう。

○出産に立ち会って、産む苦しみを感じ、また息子の存在を初めて実感して感動した。

○友だちの男性に、男の人が好きな人がいて、息子が「気持ち悪い」と言ったら、妻がていねいに説明して叱った。そのようなとき、ちゃんと向き合わないといけないと思った。

— 「コウノドリ」誕生秘話を

妻から「産婦人科のことを描いてみたら」、編集者からは「音楽ものを」といわれ、ピアニストで産婦人科医の先生をモデルにしようと思った。妻の幼なじみの産婦人科医の話聞いて、ていねいに取材を重ねた。32巻連載できて幸せだと思った。

— 25巻で、「彼女ら」の妊娠・出産をめぐる同性愛について取り上げていますね

取材の中で、「レズビアンカップルが『子どもはほしい』と言っている」という話を聞いたのがきっかけ。いろいろな対応があると思うが、精子提供を受け出産する話にした。当事者が読んで、そうだと感じてくれるように書ければと思っていた。リスペクトされている、と感じられるように話を聞くことは大事。それぞれが「選んだ家族」があってもよい。最後は希望を持たせて終わるような話にした。

#### 《第2部》 多様な性や人生を尊重できる制度、社会の在り方について

— 一 多様な性や家族を漫画で描くということについて

産婦人科医から、女性カップルが出産立ち合いを希望したと聞いて、LGBTについてちゃんと調べようと思った。パートナーシップ制度についても考えた。人としてどう付き合うのかなど周囲の理解の土台がしっかりしていないと、制度だけでできて…、という思いはある。いろいろな状況にある妊婦さんたちの不安が解消できるようにと考えて描いた。

— 一 自分がLGBTだと認識した子にどう対応するか (飛嶋さんに)

○コプリズムでは第三の居場所として、話を聞き、決めつけしないで、困っていることやイヤなことを聞くようにしている。学校では、いろいろな生き方があるということを伝える必要があり、理解を促すために、絵本の読み聞かせなどもよいと思う。

## 分科会 2 「ジェンダー平等と DV に敏感な視点で日常をみる」

～ジェンダー平等は人権の問題。気づきが差別と暴力を終わらせる～

2021 年 10 月 23 日(土)

報告者：中村洋子・中島みち子

講師：コーディネーター 山内幸雄氏 憲法学者・山梨県立大学非常勤講師

パネリスト：4 名 男女共同参画推進委員

パネリスト：望月理子 NPO 法人エンパワメントアフロッキー代表理事

第 1 部でジェンダーが生み出す差別の現実と課題、第 2 部でジェンダーが生み出す暴力である DV について意見交換が行われました。

まず山内氏から「ジェンダー平等による経済発展」という観点から説明があり、それぞれのパネリストが自身の経験に基づきジェンダー問題について意見を述べられました。その中で私が特に注目したのは、山内氏の「国際社会ではジェンダー平等が経済を成長発展させている」という指摘でした。日本が社会的経済的国際競争に遅れをとっている原因は、人口の半分を占める女性を構造的に排除し、人的資源の有効利用に失敗している結果だと思わざるを得ません。

第 2 部では、望月理子氏が DV やデート DV をなくす観点から女性の意識改革や性教育の重要性を語られました。日本では、特にこの分野が遅れており、国をあげて早急に人権教育や性教育に取り組むことでジェンダー平等の社会が実現できると強調されました。ジェンダーに敏感になること、そして暴力だと気づくことが DV 防止に繋がります。

### (感想・意見)

・日本では、あらゆる意味でジェンダー平等が遅れており、そのことで人権が侵害され、男女間で暴力や支配が生まれていることに、一人一人が気づき、発言し、是正処置を講じることに真剣に取り組まなければならないと思います。私たち女性は、見て見ぬ振りをしたり、何となく容認してしまったり、遠慮したりすることをやめましょう。自分達の権利を主張し、もっと自信を持ち、差別や暴力を許さないという毅然とした態度で立ち向かわなければならないと改めて強く感じました。

・アンコンシャスバイアス検証活動で、目黒でも取り組んでみたいと思った甲府市の事例。違和感なく暮らしている日々の暮らしを「家事 100 項目」に分類して、中学 2 年生を対象に実施したアンケートです。誰が どんな仕事を どんな時間に しているか・・・性別役割分業や地域社会での役割分担、共同参画の実態など（ゴミ出し、防災）現実を誰もが理解する難しくない良い手法だと思いました。

特別な計画でなくても、ジェンダー格差や暴力を生まない意識的な活動の積み重ねを続けることの重要性を再確認した分科会でした。

## 第4分科会 ダイバーシティ・インクルージョン働き方改革と男性の在り方

～新しい生活様式に、子育て介護に男女とも！役割を果たす今をつくろう～

2021年10月23日(土)

報告者：佐藤くみ子

講師：コーディネーター 伊藤 公雄 京都産業大学現代社会学部教授・ダイバーシティ推進室長  
石井クンツ昌子 お茶の水女子大学理事・副学長

司会：ファシリテーター 黒田 浩司 山梨英和大学人間文化学部 教授  
劉 楠 山梨英和大学人間文化学部 専任講師

第一部は、伊藤先生、石井先生による「男女共同参画社会やダイバーシティの実現に向けた男性役割」、「男女ともにワークライフバランスを」が近年重要視されるようになったこと、昨年のコロナ禍に伴い在宅勤務が増えたこと、新しい生活様式が導入され、働き方も男性のあり方も変わりつつあること、男性の過労やメンタルヘルスについての話し合い。

「ワークだけの男」「ライフだけの女」という時代が、1970年代半ばから続き、1997年には男の稼ぎで平均所得が最高値になった。そこまで働く男には、それをケアする女の存在が必然だった。男の稼ぎで家庭経済が成り立つ時代が終わり、共働きの時代へと突入する。ところが、現在は、男女二人で稼いでも1997年の収入に及ばないとのこと。その原因は女性の収入が低いことだという。非正規労働者は女性が多い。その後、仕事より家庭重視の若い世代が登場し、その中には、専業主婦希望が6割もいるという。しかし、ハウスハズバンドがハッピーなのは2、3ヶ月で、やがて社会と切断された「かごの鳥」症の憂鬱が訪れる。長く女性が抱えてきた憂鬱に男性が共感できる時代が来たのだ。

第二部は、山梨英和大学の学生16名が行ったワークライフバランスや子育て支援のインタビュー調査結果の報告と、それを受けて、家庭内の役割分業についてのディスカッション。

インタビューは、主に自分の両親を対象としている。両親は40～50歳代で、主に母親が家事・子育て・介護の主な担い手で、父親や子どもたちが手伝うという状況が見られた。両親ともそれにほぼ満足しているのは、父親の「手伝い」がかなり大きな比重を占めているからか。

その後のディスカッションでは、主に次の三点についてのやりとりがあった。

- \*1) 若い世代は変わってきているのに、社会の仕組みは変わっていない現実がある。
- \*2) ワークライフバランス(WLB)を意識するのはエリート層に偏っている。格差の拡大がWLBに大きく関係している。この点については、オランダモデルに学ぶところが大きい(労使のあり方、働き方問題、など、オランダには学ぶ点があるようだ)。正規・非正規労働者について、ILOの均等待遇を日本は批准していない。
- \*3) 親世代のWLBが子どもへの刷り込みとなる。ちょっとでも親世代を変えていこう。

(感想・意見)

WLBが、ジェンダー平等を求めていくためにいかに重要か考えさせられた。社会の最も小さい単位である家族がこの問題に真正面から向き合えるのか、WLBの必要性和、難しさを感じた。

## 男女平等・共同参画センターより

2021年は、昨年から引き続きコロナ禍による大きな変化を受け入れつつ、コロナとの共存の道を探った1年でした。

長引くコロナ禍で、アンコンシャスバイアス（無意識の偏見）に気付かされる出来事が起きた中で、男女平等・共同参画センターで何ができるのかが改めて問われているのだと感じています。

こうした状況を踏まえ、今後とも女性団体の皆様ほか区民の皆様とともに、男女が平等に共同参画し性の多様性を尊重する社会の実現を目指し、歩を進めていきたいと願っております。

以 上